

2019年10月25日

大学共同利用機関改革に関する作業部会におけるヒアリング意見書

名古屋大学 大学院医学系研究科 教授

宮田 卓樹

「大学共同利用機関の検証」における主な観点と指標例 に対する意見

<運営面>

とくにありません。

<中核拠点性>

「主な観点」の中に「研究者コミュニティが明確であり…」とありますが、「明確である」とは何か、どんな状態を指すかが、私には分かりづらく思えました。もし「研究者コミュニティ」が、自然科学研究機構として受け持つ「生物科学」全体規模を指すのであれば、生理学研究所も基礎生物学研究所も、当然、それらを受け止めるという意味で該当しており、基本的確認に近いレベルの「検証指標」が示されている、と解釈しました。

しかし、一方で、これがもし、例えば、生理学研究所には生理学研究所に特化した「研究コミュニティ P」が、基礎生物学研究所には「B」が「別々にあるべき」、という意図の文章であるとするならば、そうした観点が「指標」となることには、若干の懸念を覚えます。もちろん各々の研究所には発足当時の理念、これまでの実績に裏打ちされた「個性」があると、それぞれと関わり合いを持ってきた私には感じられます。しかし、そのような「研究所の個性の明確さ」が、「共同利用」やその他の関わり合いを持つとするゲスト研究者に対して“敷居高さ”を感じさせるようでは、まずかろうと思いません。分野横断性が当然のように求められる現代にあって、「多様な研究者が、自身の現時点での属性や研究上の立ち位置に無関係に、自由に新しい手法・アイデアに出会える“中核”である」というミッションを共有できるような（ユーザー・コミュニティを表す言葉として過度に「明確」さを求めない）「観点・指標」であって欲しいと願います。

<国際性>

示されている「観点・指標」は、「国際性」を「現在、国際的にどれだけ有名であるか」と定義しているかのように私には思え、外国との関係性・交流に関してやや静止画像的な印象を持ちました。少し別の「国際性」の捉え方もあるのでは、と思いました。

私は、今から 25 年ほど前に生理学研究所での滞在共同研究を契機として、同研究所の国際シンポジウムに参加しました。招待されていた米国研究者にポスターを見てもらう機会があり、その会場でのやりとりを通じて翌年からの留学が叶いました。論文上でしか知らなかった海外研究者に直接ぶつかることができたことは、研究者人生全体にとっての一大事でした。こうした「国際舞台への若手送り出し」、「長い（10 年以上に及ぶ）連鎖の一步目」の場を提供するという役割は「コミュニティに広く開かれた国際的学術研究拠点」ならばこそ果たせたと、「実例」を振り返ります。「国際シンポジウム」開催そのものは「現在の活動状況」の項目として既に掲げられておりますし、「人材育成」も別「観点」として示されておりますが、「両者の隙間」的な視点として一考に値するかと思いました。ただ、こうした「事例」を前向きないし後向きな調査で数値として示そうとすることには、大変な煩雑さが予想されますので、「意義の認知・共有」あるいは「体験紹介」などで十分かとも思われます。

<研究資源>

とくにありません。ただ、以下の「新分野」の項で「研究資源」に関連した記載をしました。

<新分野の創出>

この「新分野の創出」に関する「主な観点」の一つである「学際的・融合的領域において... 著しく高い成果」という項目は、「中核拠点性」に関する「主な観点」である「著しく高い成果」と似ており「学際的・融合的領域」という部分だけが異なるという構造です。たとえ似ていても、この「主な観点」自体は、「新分野の創出」と「中核拠点性」との間で明瞭に区別されており、問題ないと思いますが、続く「指標例」までもが、「中核拠点性」に関する記載をベースに「学際的・融合的領域における」と添えるにとどまっているのは、いささか安易に過ぎると感じられました。

「新分野」（“新たな学問分野”）ができた、と言えるには、試み・取り組みの開始からどのくらいの年月が必要なのでしょう？ 果たして、「中核拠点性」に関する検証と同じ時間スケールで成否や進捗を判断し得るような問題でしょうか？ 「Top 10%」などの数値計算が、既存「分野」ごとに行われることを踏まえれば、そうした従来法は（そ

もそも計算の分母となるべき相手すら不明瞭な状況であるため)「新分野」成立・萌芽の鋭敏な検出には向かないはずです。もし「実際には、『学際的・融合領域』程度のことを念頭に(「指標例」における名指しに表れるように)おいているに過ぎない」のであれば、インパクトに頼って(明瞭な定義のないままで)「新分野」と項目に掲げるとは、適切ではないように思います。一方、「学際的・融合的領域における」という部分のみに注目して「新しさ」を検証するというのも、論文引用に関する何らかの「計算」は可能かもしれませんが、単純すぎるように思えます。

理化学研究所の評価では「比類のないユニークな成果」が、注目点として掲げられていました(最新のものではないかもしれませんが)。私は、大学共同利用機関の研究者諸氏には、「研究資源」を身近に目にし、動かす当事者としての(「研究資源」の存在を聞きはしていても実際に見たことも触れたこともない大学の研究者とは異なる)現場体験や、機器類の日進月歩予測などに触れやすい環境にあることにもとづいて、「ユニークな発想」を持っていただくことを期待したいと思います。そして、そうしたご自身の問いに立脚した「こういうことができるかもしれない・できるといいな」という夢語りを例示して欲しいと思います。そういう「旗振り」が、しばらく後に、「新分野」と呼ばれるようになるかもしれない新しい流れを(「夢」に乗るユーザーの押し寄せを経て)生む(かもしれない)ならば、それこそが、この箇所で議論する内容の評価対象として妥当なのではないでしょうか(それくらい時間をかけないと分からない話をしようとしているのではないのでしょうか)。

「いつ刈り取ることができるかも分からない、見たこともない稲穂」を「指標例」に掲げるのではなく、「田畑の耕しを丁寧にする」、「蒔く種のひとつひとつに ID 番号をつける」ような「春先の農作業」をきちんとカウント・記録する(「社会との関わり」での態度に通じるような教育的ふるまいを、サイエンスの場でも評価基準とする)など、地に足が付いた(したがって「機関ならではの個性」ごとの評価もしやすい)方法が必要なのではないでしょうか。

<人材育成>

とくにありません。ただ、「国際性」の箇所で、「人材育成」に関連した考えを述べました。

<社会との関わり>

とくにありません。

大学共同利用機関に期待すること

生理学研究所，基礎生物学研究所，遺伝学研究所のいずれにも大きく支えられてきた立場，そして現在「大学」に属し日本の未来の研究を担う人材の育ちを期待する立場として，私が最も申し上げたいことは，これらの機関は，いつでも広く開かれており，そこに集うすべての者に対して，成長・発展のきっかけを与える潤った森のような，あるいは豊かな珊瑚礁のような，「学術生態系」全体にとっての尊い支えであるということです。「自己のなかに多様な方法論，発想を持ち，育む」うえでの道標，刺激役として，これらの機関を，心から頼りにしています。

私は，自らの生育を支えてくれたこれら「大学共同利用機関」の豊潤さが，現在の若手はもとより，未来の若人にも十分に届き，役立てられるようにと強く願います。これは，環境・生物多様性の問題における議論点のひとつである「世代間倫理」の観点（本川達雄氏，「生物多様性」2015年 中央公論社）で大切に扱われるべきと，私には思えます。人の手で作られたという意味では「里山」に近いと言えるかもしれませんが，“多様で豊かな営み（問いかけ）を育み助ける場”としての「大学共同利用機関」をきちんと（森は森として，珊瑚礁は珊瑚礁として）残すのは，“次世代の利益”を真摯に考えた「倫理的」な行動であろうと確信します。